

## オフレコの話(時効のはなし)(その2)

de JAIRIZ

会社でも無線、帰宅してからも無線。寮生活だったので、本来は無線厳禁。そこはアマチュア精神(?)で早速買い込んだ TX-88D・9R59D ラインと細いエナメル線を軒下に張り巡らしたワイヤーアンテナでオンエアしていた。が、思わぬ伏兵が出た。寮生の中から BCI(ラジオアイ)のクレームが発生。このため折角のHF運用はあきらめたが、6m なら BCI は出ないから良いだろうとアクティブに運用する。トリオから出たての TR-1000 (1W/AM) からでしたが、今度は何と電監から TVI クレームが来た。寮から近距離の家に TVI が発生し通報された様だ。こちらは会社経由であり、始末書を出して寮からの電波発射は完全にシャットアウトになってしまった。当時の TV は混信対策などがされていなかったの、1W の小電力でももろにかぶってしまったようです。

ガックリしましたが、念願の上級ハムになるべく鍛錬を積み(?)就職1年目の4月期に2アマを受けて合格することができた。さっそく、実家に固定局(100W)を開設。それからは事ある毎に実家に帰ってハム生活に浸ったのです。当時の落成検査は職員2名が現地に来局して行いました。検査までには色々ありました。

法令上の予備免許期間は6カ月ですが、検査費用の関係で近くにもう1局の検査が無いとスケジュールが組めない、という理由で落成検査は約1年後になってしまいました。その間、電監(当時の監督官庁名は電波管理局)から50W/移動局で申請してもらえば持込検査ができるが…とかの話もあったが結局、予備免許期間が6カ月以上という法令外のことが起こってしまった訳です。…6カ月が過ぎても試験電波を出して交信していました。hi

又、当時の TV は混信対策もされていない代物で、かつ、実家周りは TV 電波の弱電界地域であり、当然ながら我が電波による TVI が発生していました。落成検査の時、検査官は当家を訪ねる前に、近くの家で TVI 調査をしてから来るという情報があったので、訪れそうな隣家にあらかじめ手を回しました。事前に検査官が回ってきたら「障害は無い」と言ってもらう様にお願いしたわけです。

「対策」の効あり、無事に落成検査が終わりました。…今ならこうはいかないでしょう。当時はかなり大らかでした。それは、中学・高校生頃までは、ラジオの具合がおかしいとか TV の写りが悪い等と話が来ればすぐに対応し、直したりしていたラジオ少年の頃の御利益もあったことと思っています。

話を戻します。TVI 事件後は、今から考えれば『問題児』だった自分もアマチュア無線活動できなくなったので静かにしているように見えたことと思います。

しかし、入社 1 年後くらいから急に出張が多くなってきて、押さえていた無線の虫が又騒ぎ出してきました。

当時は、まだTVのサービスエリアがカバーされていない地域が日本全国で虫食いのようであった為、NHKや民放はサテライト局というものを多く建設している時期であった。この為、その要員に加わったことから出張漬けになった訳です。工場はフル稼働で製造し、それを調整・検査し、現地へ輸送して工事するのです。とても忙しく 1 年のうち多い時は 200 日超の出張をしていました。一つの現場が終わり帰社して、1 日おいてまた別の所へ出張などということもあり、モーレツ生活。出張先は北海道から九州までがエリアでした。さて、そんな中でも、珍な市へ出張の時は、リグを背負って出かけたこともありました。もちろん工具や旅行用品の他に持って行くのでたいへんでした。リグはたぶん FT-101 で重量も結構なもの。それにケーブルやDP-ANT・電鍵等々だけでも一荷物、それらを背負子に背負い、両手に仕事用荷物を持って列車で現地まで…。あの頃は馬力がありました！ でもあたまに「バカ」がつく状態でしたね。Hihi 笑ってやってください。…社内でも相当な「変わり者」だったと思います。

サテライト局は山の上に建てられるので、大概是朝～夕方までが仕事時間。期間は1～2 週間であったので、何日かはオンエアすることができたわけです。アア、あの時の徳島県阿南市移動はまだ記憶に残ります。DPアンテナのポールの竹竿探しも苦勞しました。

リグを持って行かない時は、現地のハム局の訪問をしたりしました。宿から現場に行く間に目を凝らして風景を見てアンテナなどを探すわけです。そして、仕事の合間を見て『シャック見せて下さい!』とお訪ねしました。快く迎えてくれることがほとんどで、断られたことは記憶にありませんね。訪ねてみたら二文字コールの大OMさんだったり、四国エリアの医師クラブ・グループの会長さんだったり。ある時はアマチュア局と思って行ったら漁師さんの連絡用の無線(CB)だったり、でも歓待してもらい帰りにはスルメを処分に困る程・山ほど頂いたこともありました。今なら何の音さたもなく急にお訪ねしたら、不審がられて家にも上がらせてもらえないでしょうね。FBな時代でした…。

遊んでばかりいたのではありません。初期の頃はVHF帯の機器の受信部はトランジスタ化(セミトラ化)されていましたが、UHF帯は3極真空管(マイクロセラミック管)のものがありました。真空管を使う機器は輸送するとき球は取

り外して別梱包で送り、現地で再度取付けるわけですが、輸送中の振動や球の微妙な違いがあって、再調整が必要でした。御存じのように TV の帯域は6MHz あるので、サテライト局では入力から出力までの6MHzバンドを増幅するようになっていました。これがなかなか曲者で、簡単に復元できるとたかをくくって受信部の調整にかかったものの中々調整できずに三日三晩不眠不休で調整したなどという事もありました。

サテライト局が設置されている場所は、いわゆるロケーションのFBな所なので、車横付けできる所もありましたが、徒歩で登らなければならない山頂付近のことも多くありました。事情によっては索道を使って荷揚げできる所もありましたが、人力荷揚げの所も多くありました。装置設備は現地で人夫さんを雇って荷揚げするのですが、測定器類は「駅止め」扱いで送って自力で山頂まで運んだりしていました。掃引信号発生器(スイープジェネレータ)・シンクロスコープ・周波数計(カウンタ)・電界強度測定器・高周波レベル計(デジボル計)等でした。特に、電界強度測定器はSG部とRX部が別体形で40kg位ある上、UHF局の場合は更にUHFコンバータという箱が付属していました。そんな物を背負って山登り…。それでも、書類とお弁当を詰めたナップザックを背負う人より早かったですから。Hi あの頃は馬力ありました～。

サテライト局の設置により、全く TV が見られなかったのが見られるようになるからと、山間部の難視聴地域の町村では、期待が大きかった。そんな時、町長さん・村長さんが一席設けて下さり、御馳走に預かるなどというような美味しい事も偶にはありました。

TV 装置は、6MHzのバンドの中に映像・カラー・音声の 3 信号が存在するので、いろいろな周波数成分のスプリアスが発生します。バンド内や近傍にスプリアスが出るとなかなか厳しいものがあります。当初はこれが規格ギリギリのものもあり、電波監理局(当時)の検査の時は、測定器のATTを素早く入れる操作等して測らないで通り過ごすような芸当で検査を通したこともありました。その後は、スペクトラムアナライザ等の可視化測定器の出現で、そんなことも出来なくなりました。もう時効となった話の一つです。hihi

そんな時代(サテライト関係の仕事)が8~9年は続きました。全国的に段々とサービスエリアが広がって、難視聴地域が減少するにつれ、仕事量が減ってきました。仕事の多くが、いわゆる国策放送局(?) 関係だったので年度仕事(4月以降発注され、夏~秋~冬に現地工事)が多くなり、相撲取りではありませんが「一年を十日で暮らすいい男」

みたいな生活になった訳です。5,6ヶ月は全く仕事なくなるような状態で、その時期は他の職場のお手伝い等もしていました。門外漢の仕事…短波送信機の調整・検査業務:KW クラスの送信機で調整中にミスマッチさせバリコンから火花を飛ばし、調整ではなく、壊し屋さんになってしまったり、設計の手伝い:高価なパワートランジスタをいくつも壊してしまったり…失敗談には、いとまがありません。

本業のサテライトの方では、時間余裕があるときは先輩上司連を先頭に調整方法の研究や技術資料の作成等などよく勉強していたように思います。また、今考えて見ると職場には時代の先端の技術に携わっている、という空気が満ち満ちていました。だから、仕事がないという悲壮感はいあまり感じていませんでした。

この頃の、超ヒマなどきの時間の過ごし方は、後々とても役立つ経験になりました……。

このサテライトグループにいたとき、かの小澤 OT の下で FPU (TV 用無線中継伝送装置) の実験をした事がありました。冬の東北地方・某 TV 局に行きました。早朝で雪も降っていたように記憶しています。当時、現用されていたのは O 社製の 80 cm 口径程のパラボラANTと20kg程のゴツツイ金属箱に入った中継装置のセパレート構成のものでした。一方、小澤OT設計のものはカメラの三脚に装備できる40~50センチ程のパラボラアンテナと一体の軽量な中継機本体という構成。当時のSHF帯(5GHz~10GHz位)は、まだクライストロン管などが主流でありましたが、当時最先端技術の全半導体化装置(終段はバラクタダイオード?)であったと思います。早朝の中継番組のサブ機として画像・安定度などを比較しましたが遜色のない結果でした。技術的にも扱い易さからも現用機を圧倒していた。しかし、現状重視・変化に慎重の気風の TV 局には勝てず、売込みは失敗。時期尚早であった為か、とてもFBだった小澤OTの技術が陽の目を見なかったのは今でも誠に残念と思っています。

ズツとサテライトの仕事をしていたかったのですが、このように需要が無くなり、次はにわかに脚光を浴びてきた「防災無線」を担当することになり、最初に所属していた V/UHF 無線グループに戻るようになりました。対象の無線は、市町村や都県の業務用無線です。60MHz/150MHz/450MHz 帯の固定回線と移動回線の、実験・工事・点検・修理などの各業務全般に首を突っ込むことになった訳です。

守備範囲は、おもに関東・近畿・沖縄でしたが、伊豆七島や小笠原も入っていました。

…これってすっかり、移動運用HAMの延長みたいなものだと思いますか。

(つづく)